

真夏のオアシス・ドリーム【第三章】

最悪の夏休みの入り方だった。結局、あの日から俺は二人と一言も交わしていない。

終業式の後とか、学期最期のホームルームの後とか、旭は俺に話しかけようかどうか迷ってるのがわかった。でも、俺は顔すら満足に合わせられなかった。

もう八月に入ろうとしている。夏期講習と『三日月園』それに自宅を往復するだけの単調な日々が続いていた。

相変わらず雨が無く、陽がギラギラに照りつける。

海が近いし、小さな遊園地もある。そして駅の北側には山もあるから、観光客が目立つようになってきた。

街中では多くのカップルも見かける。今頃は耕介と旭も高校最期の夏を楽しんでいるんだろう。

夏期講習の帰り道、何もやる気が起きないで、ただただ周囲に流されている自分にも気が付き、気が滅入る一方だった。

耕介の言う通り、俺はバカだ。だから全て失うし、流されるばかりのつまらない生活を送っている。

街路に冷たい風が流れてくる。目を移すと、脇にあったゲーセンの自動ドアが開いて人が出てくる場所だった。

た。俺は無視して駅に向かおうとした。

「待てよ」

俺は嘆息して振り返った。そこには耕介が一人で立っていた。

「最近携帯にも出ねえから、連絡が取れないって言うってぜ」

「何のことだよ？」

素っ気無く返すが、怒鳴ろうともせず冷めた目で、「旭に決まってるだろうが」

呼び捨て……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～

俺はその名前が出ると、きびすを返そうとしたが、

「フラれちまったよ」

視線を戻すと、ヤツはすでに背を向けていて、顔だけこつちに向けて、

「何で俺がフラれたかわかるか？」

ヤツは視線を外して、歩き出すときこう言った。

「そりゃあ、俺がバカだからさ。で、こんなことをお前に教えてやるのは、お前がバカだからさ」

『三日月園』への道すがら、ヤツの言葉を何度も思い返してみた。最近切ったままだった携帯の電源をいれてみる。センター問い合わせをすると、大量のメールが届いていた。そのほとんどは旭からで、内容は『電話くだ

さい』と書いてあった。

「電話して、何言えってんだよな」

苦笑して、携帯を胸ポケに突っ込んだ。

「あ、僚兄だー」

『三日月園』に入ると、外で遊んでいた子どもたちが駆け寄ってきた。

「鞆置いてくるから、ちよつと待ってな」

「はい、と元気のいい返事が返ってくる。中に入って、職員室に荷物を置きに行くと、そこで園長夫妻がお茶を飲んで歓談していた。

「お、僚君。いつもありがとうな」

園長はいつもの柔和な表情で迎えてくれた。

「いえ、好きでやってることですから」

照れくさくて、思わず頬を掻きながら、荷物を置いて

『みかづきえん』の刺繍が入った前掛けを着ける。

この施設を作って四十年という老夫妻は、その雰囲気
が旭にそっくりだった。気持ちが悪く落ち着くというか。

昼下がり時には、子どもたちの多くは疲れて寝ている
が、元気が余っているのを見て、砂山を作って遊んだり、
なにかしらの遊びをしている。

遊んでる子に、驚かされたのは、一緒に遊び始めてす
ぐのことだった。

「僚ちゃん。なにかあったの」

「ん、優ちゃんは何でそう思うの？」

身を屈めて、目線を合わせると、優ちゃんは俺の顔を指差して、

「だって、僚ちゃん。さいきん元気なさそうなんだもん。
かのじよとケンカでもしたの？」

俺は、そんなことないよと応えて、頭を撫でてあげた。

でも、優ちゃんは納得してくれなくて。頬を膨らませ、

「うそ。だって、さいきんおねいちゃんの話してくれな
いんだもん」

俺はちよつと返答に窮した。子どもって意外なトコに
敏感なんだよな。

「だめよ。ちゃんとかなおりしなさい。僚ちゃん、い
つもなかよくしなさいっていつてるじゃない」

俺が、わかったよと言って、指切りして約束すると、
優ちゃんは俺の頭を撫でて、友達の輪に戻って行った。

その中の一人の男の子と仲よさそうにくっついている。

いつから素直じゃなくなるのかな、人間てのは。そう
思うと、子どもたちはあまりにまぶしく映った。

八月の初日も炎天下。ただ、のどが異常に渴くのは、
そのためではなかった。

学校での夏期講習が昨日終了したので、俺は『榎』で
マスターの奥さんが作っている自家製チーズケーキを持
参して、旭の家に向かった。

とりあえず、謝らねえと。

ストレートに謝ればいいよな。それで、きつと元に戻るはずだ。

そう思いつつ、インターホンがなかなか押せずじつにいた。……迷っても仕方ないよな。

思い直して、ボタンを押す。しばらくして、聞かなくなつて久しい声が、

「はい、どちらさまですか？」

「俺だよ」

応えると、しばしの沈黙が続いた。俺はただ待っていた。

「今行くから、ちよつと待つて」

少しして、玄関が開き、ノースリーブのシャツにショートパンツという、意外にラフな出で立ちの旭が出てきた。しかし、困惑しているのが見て取れた。目をあまり合わせようとはしてこない。

「これ、お前好きだろ」

言つて、キーキの入った包みを押し付ける。それを旭が手にしたとき、頭を下げて謝つた。

「スマン。なんか、気持ちちが整理できなくてさ。お前に当たつていたかもしれない」

頭を上げると、旭は首を横にブンブン振つて、

「う、ううん。いいんだよ、もう」

その後、二人とも言葉が続かなくて、夏の暑い日差し

の下で向き合つていたが、

「あのな、俺、耕介にお前に対する気持ち教えられたとき、どうしようもなく頭中がまとまらなくなつたんだ」
旭は黙つて聞いている。俺はそのまま、今日までのことをしゃべり続けた。

耕介に殴られたこと。フラれたのを告げられたときのこと。『三日月園』でのこと。

「だから、結局俺はバカだつたてこと」

俺がそう言うのと、『三日月園』の優ちゃんみたいに旭は頬を膨らませて怒つた。

「そんなことないよ。自分のことすぐ悪く言うの良くないクセだよ。だから何でも考えすぎちゃうんだよ」

「けど……」

やっぱりバカだ、と言おうとしたトコで、旭の軽いパUNCHがあごに当たつた。

「それ以上言つたら、本当に怒るからね」

その時、風が吹いて旭の前髪がサラサラと揺れた。そのときには、旭はあの屈託のない笑顔だつた。

「許してあげる。だからもう思いつめたような顔しないで」

旭は真つ直ぐに俺を見ていた。

「前にも言つたでしょ。俺は子どもたちのヒーローだつて。俺は怖いけど、でも本当は優しくして。だから理由もなしに冷たくなつたりしないもん。だから許してあげる

よ
「俺は、その言葉に救われると同時に、それでも引つか
かることがあった。」

【第四章へ続く】